

# 金責めロリ姫エリナ3

キ〇タマ保護法案！



玉子王子 著

## 1章 こんな事してたら、この子たちのキ〇タマ、クラッシュしちゃうじゃないの！ 二個とも！

運動場の端、一輪車置き場。

そこに三人の少年が立ち、女子十人ほどと対峙していた。

「この一輪車は俺の専用機だっていったらろ！ 俺専用ガ〇ダムだっていったらろ！」

関。

Y年C組の男子。

かつては男子全員を率いるクラスのリーダーだった。

うさぎ〇学校は、男女で別れて争っている。

と、いうのは表向き。

実際にはほぼ男子が女子を圧倒して勝負がついていた。

そこに転校してきたのが後藤田エリナ。

Y年だが、もう少し下に見えるぐらい小柄な少女。

しかしこれが、野獣のような凶暴性を持った娘だった。

特に男子にとって恐ろしいのは、男の急所を攻撃するのが、どうも好きで好きでたまらないらしいということだ。

転校してきてからそれほど時間も経たないうちに女子のリーダーとなり、他のクラスと組んで彼女たちを倒そうとした関たちはエリナがあつめた圧倒的な数の女子に圧倒され、肉玉を蹴られ、フルチンにして晒し者となった。

おかげで関と、彼の友人だった他のクラスの指導的立場の男子の地位はがた落ちになった。

何とか失点を取り戻そうと何度もエリナに立ち向かう関だったが、そのたびに急所攻撃と圧倒的な数の女子たちに敗北し、その度に仲間が減っていった。

いまや、彼と常に一緒に戦ってくれるのはつるんでいる友人だけになっていた。

クラスの男子二十人が関の兵力だったわけだが、いまやこの場にいる三人だけ、ということだ。

ほぼ絶望だが、諦めていない。

その原動力は、不屈の闘志などではなく、かなり残念なものだった。

「お前らキ〇タマも無い連中は、端のほうで砂遊びでもしてろ！」

「そうだそうだ！ 悔しかったらチ〇ボ生やしてみろよ！」

関の原動力、それはいわば女性蔑視だった。

**女などに負けるはずがない**、と何度となく負けに負けているのに、信じて疑わない。

「関……よくそんな事言えるね？」

エリナの友人のマリ。

水田マリという**大胆不敵な名前を持つ**。

「そのキ〇タマ蹴られていっつものた打ち回ってる奴が……」

「それだよ！」

関。

「お前ら女子が俺ら男子に勝てるのは、キ〇タマ狙うからだ！」

「そうだよ。だって男子の方が強いんだから、当然だよ」

もう一人のエリナの友人、アイ。

直江アイ。

この二人がエリナと最も親しい女子である。

二人とも、関より背が高い。

というか、女子の大多数は男子より体格がいいのだ。

この年代は、女子の方が早く発育が始まるため、体格もいいし力もある。

実際のところ、普通に戦っても女子が勝ちそうなものなのだ。

にもかかわらず、「女子は弱い」と考え、容赦なく急所攻撃をしてくる。

体格で負けた上に一方的に急所を狙われては勝てるわけがない。

それはもう、ようするに「男子の方が弱い」といいののではないかと思えるが、ほとんどのものがその当然の結論に気づいていない。

その理由は、エリナのプロパガンダによる。

「当然じゃねえ！　だってキ〇タマは……はぐあっ！」

パン、と軽い音。

関の股間から小さな爪先が突き出される。

関の左右の仲間が青ざめて振り返る。

関の背後から、いきなり金的蹴りを食らわしたのが誰か。

その場にいた者たちは見ないでもわかった。

「一輪車を男子だけで独占しようとして、しかも女の子を馬鹿にするようなことを言う……これは許せないわねえ」

エリナは女子としては変わっていて、便所も行きたいなら勝手に一人で行く。

そのため、今少し仲間から離れていたのだ。

その間に揉め事が起き、戻ってきたエリナがそれに気づいた。

そうなる、すぐに合流とは行かないのがエリナという**金責めロリ**だった。

——折角離れて、敵の視界から消えてるんだから奇襲でキ〇タマゴリゴリしてやらないと嘘だよな。

「おんごおおおお」

「おんごおおおお」  
股間を押さえ、転がってのた打ち回る関。  
それを指差すエリナ。  
「見て！ 強い男の子も、

**金のタマタマ**

蹴られたらこの通りよ！ 皆、勇気を持って戦おう！」

三倍の人数いる上に  
相手より体格もいい少女たちに「勇気を出せ」と、  
まるで弱者であるかのような顔をするエリナ。

いつもこの調子で、

**都合のいいプロパガンダ**

をかましまくるのも彼女の常勝を支えていた。

股間を押さえ、転がってのた打ち回る関。

それを指差すエリナ。

「見て！ 強い男の子も、金のタマタマ蹴られたらこの通りよ！ 皆、勇気を持って戦おう！」

三倍の人数いる上に相手より体格もいい少女たちに「勇気を出せ」と、まるで弱者であるかのような顔をするエリナ。

いつもこの調子で、都合のいいプロパガンダをかましまくるのも彼女の常勝を支えていた。

関は、それどころではなかった。

エリナは小さい。

女子とはいえ、小さいものは小さいのだ。

特に、エリナはクラスで一番背が低く、彼女が「女子は弱い、力がない」というとそれらしく見える。それも彼女の計算のうちであった。

全体的には女子の体格の方がいいが、全員でないことで上手くカムフラージュできている。

まあ、○学生が大して細かいことを考えないということもあるだろうが。

ともかく、小さいエリナであるから、前に付いている男性器を背後から蹴り上げるのはなかなか難しい。いや、背が高くともそれはそれで難しいだろう、後ろから上手く股間に爪先を埋めるのは角度的になかなか難しいのだ。

しかし、嫌になるほど金蹴りに慣れているエリナは、体格の割には怖いぐらい的確に背後からの金的を関に決めていた。

肉玉が持ち上げられ、押し潰され、元から大きくはない関の一物が一瞬で萎みあがる。肉袋のなかには腹膜が伸びてきていて肉玉を包んでいる。そこを強打されると腹膜が引き締まって内臓を締め付ける。

「ぐむううう」

股間を押さえ、転がり続けている。

そうしている間に、周りで戦いが始まる。

戦いといっていいのか、結構微妙ではある。

「みんな、油断しないで！ 男の子は強いから！ 複数でかかるのよ！ そしてキ○タマ狙って行って！」

体格で勝る女子がぞろぞろと群がってくる。しかも自分たちの方が弱いと思っているので数で押すことも急所攻撃をすることも、何の後ろめたさも持たない。

「うおおお！ あ、ちょ……おぐあっ！」

「て、てめえら卑怯……はぎあああ！」

関の友人二人は空手とボクシングを習っているが、押し寄せる大量の女子にあっさり押しきられる。関が倒れているので、五人ずつ群がってくるのだ、勝てるわけがない。

それでも前に向けて手足を振り回すが、前の女子は多少距離をとり、横に他の女子が回りこむ。

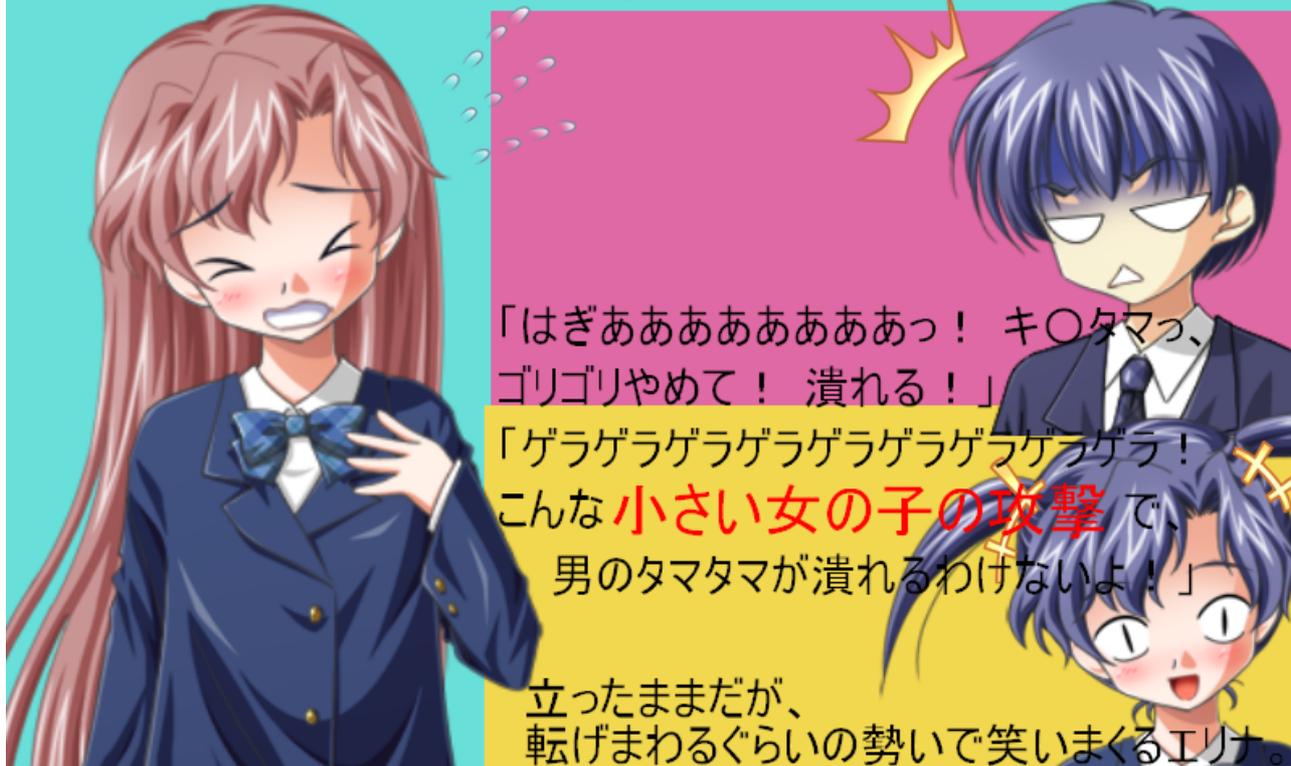
腕を掴み、股間に握った拳を叩き込む。

叫び、動きを止めると次々別の女子が引っ付き、服を掴み、股間に膝蹴り。

叫び、動きを止めると次々別の女子が引っ付き、  
服を掴み、股間に膝蹴り。  
「やった！ アイちゃんもっとゴリゴリ

## キ〇タマ潰してあげて！

女の子馬鹿にしてたんだから当然のことだよ！ 報いのキ〇タマ！」  
「ごめんね！ キ〇タマごめんね！」



「はぎあああああああっ！ キ〇タマっ、  
ゴリゴリやめて！ 潰れる！」

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！  
こんな小さい女の子の攻撃で、  
男のタマタマが潰れるわけないよ！」

立ったままだが、  
転げまわるぐらいの勢いで笑いまくるエリナ。

「やった！ アイちゃんもっとゴリゴリキ〇タマ潰してあげて！ 女の子馬鹿にしてたんだから当然のことだよ！ 報いのキ〇タマ！」

「ごめんね！ キ〇タマごめんね！」

「はぎあああああああっ！ キ〇タマっ、ゴリゴリやめて！ 潰れる！」

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！ こんな小さい女の子の攻撃で、男のタマタマが潰れるわけないよ！」

立ったままだが、転げまわるぐらいの勢いで笑いまくるエリナ。

ぶっちゃけた話、ショタたちの睾丸はこの物語の中では何があっても潰れることはない。

しかしそういうご都合主義がなければ、エリナたちの攻撃は十分睾丸を破壊する威力があるだろう。

エリナたちの手加減のなさは幼さと、自分たちに睾丸がないことで加減がよくわからないということ、そして潰れてもこの世界ではナノテクで治るから大丈夫と思っている——確かに治るが、潰れたときの痛みは軽減されないのだが——という複数の理由から来る。

それと、エリナによる「自分たちは弱者だから金責めは当然」という扇動も理由の一つだろう。

「あぎゃあああああああっ！」

「やめてやめてやめ……」

関の友人二人は女子たちに捕まり、地面に押さえ込まれていた。

そして当然のように足を開かされ、電気あんま風の攻撃を食らっていた。

電気あんまというか、そういう形の**睾丸踏み潰し**という気もする。

「そらそらそら！ 電気あんまで玉潰しだよ！」

「あばばばば！ やめてくれあああああああ！」

「はぎあああああっ！ キ〇タマ潰れるっ！」

「ぎゃはははは！ キ〇タマ潰れろ！ キ〇タマ潰れろ！」

「威張ってるから悪いんだよ！」

「そうだよ！ 女子に一輪車使わせないとか酷いよ！」

「キ〇タマ潰しちゃえ！」

「去勢だ！ 去勢！ 意地悪男子は去勢しかないよ！」

もちろん本気で玉を潰そうとは思っていない女子たち。

ただ、彼女らが振り下ろす足は、時々「**ご都合主義がなければ潰れる威力**」を持ってはいた。

やはり肉玉を持たないロリたちにそこへの攻撃を的確に加減する能力はないようだった。

元々は玉が無いだけにかかなり遠慮していたが、エリナと共に金責めをしまくっているうちにそういう女特有の男性器への優しさは吹っ飛び、逆に女特有の男性器への遠慮なさが出るようになった。

白目を剥き、泡を吹き出す二人の男子。

と、それを尻目に、何とか立ち上がった関。

——清水、藤田、ごめん……俺逃げるわ。

ごめんというか、最後の仲間を失う事になるかもしれないが、関はそれでいいのだろうか。

かといって、踏みとどまって女子たちに捕まれば同じように電気あんまという名の**睾丸踏み潰し**で休み時間が終わるまでのた打ち回る可能性もある。

関が逃げるのも仕方ないかもしれない。

と、指揮官として周辺を見ていたエリナがその逃亡に気づく。

「あっ！ 関がキ〇タマ惜しさに逃げるよ！ 皆捕まえて！」

「本当だ！ この腐れキ〇タマ！」

「この卑怯者！ 仲間置いて逃げるなんて！ それでもキ〇タマ付いてるの！？」

「大人しくキ〇タマ潰されなさいよ！ 男でしょ！」

「逃げるような奴はキ〇タマゴリゴリしてやる！」

全員が**肉玉**について**絶叫**しながら関を追い始めるエリナたち。

悶絶状態の二人は放置だった。

つまりは、十一人ほどで関一人を追う形。

「ひ、ひいいいっ！」

逃げなければ、精々三人ぐらいしかかかってこなかっただろう。

だが、いまや十一人だ。

とても勝てない。

というか、エリナ一人の時点ですでに勝てない。

エリナは少し前にY年最強といわれた山本という男を破っている。

正確には二回ほど勝ちかけたところで水入りになったのだが、その後山本はボロクソにやられて関同様地位がガタ落ちしたため、もうエリナの判定勝ちという風に皆見ている。

山本が失墜した今、Y年最強は誰なのか決まっていない状態だ。

誰が最強か、という話題は男子たちが主にやっているのだから、女子であるエリナが最強ではないかという話題は避けられる。

そういう風潮の学校なので、男女間の争いも起こるのかもしれない。

まあ、今の関にはどうでもいいことだった。

逃げ切って肉玉を守り抜くか、それとも掴まって十一人のロリに踏み潰されるか。

実際に潰されはしないが、休み時間が終わるまで電気あんまを食らって悶絶するのではそう変わらないだろう。

校舎の中に駆け込む関。

というか、下駄箱前で足が止まる。

前に女子が立ちふさがったのだ。

同じY年だが、別のクラス。

「コラ男子！ っていうか関！ 靴履き替えないとダメでしょ！」

「うっせーブス！」

その一言で十一対一から、さらに戦力比が崩壊する関。

下駄箱周辺にいたY年の女子が一斉に席に群がってつかみかかる。

「こらあっ！ どうせ何かやって、エリナに追われてんでしょ！」

「や、やめろ！ 放せ！」

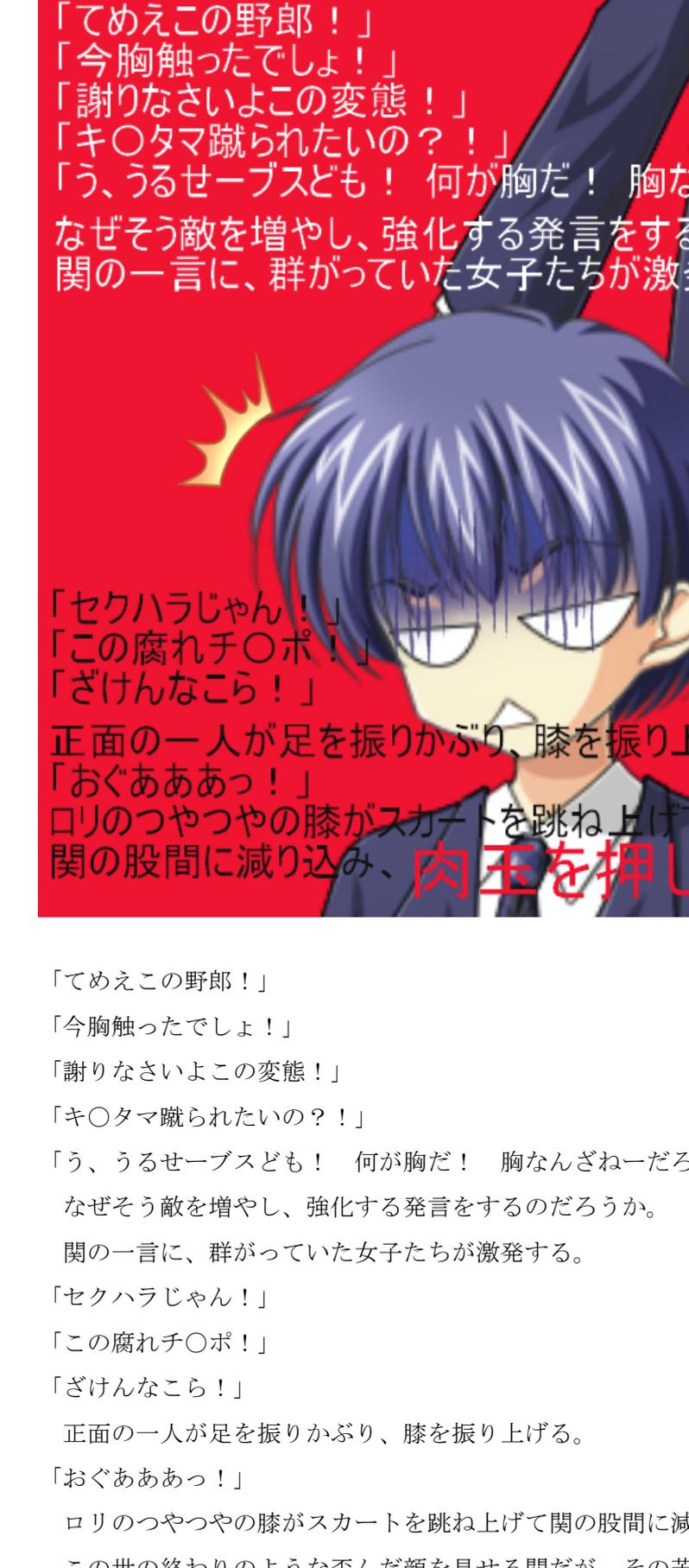
群がり、服を掴む女子を押す。

と、その手が胸に当たる。

「あっ！」

叫び、離れる女子。

周りの女子が殺気立つ。



周りの女子が殺気立つ。  
「てめえこの野郎！」  
「今胸触ったでしょ！」  
「謝りなさいよこの変態！」  
「キ○タマ蹴られたいの?!」  
「う、うるせーブスども！ 何が胸だ！ 胸なんざねーだろうが！」  
なぜそう敵を増やし、強化する発言をするのだろうか。  
関の一言に、群がっていた女子たちが激発する。

「セクハラじゃん！」  
「この腐れチ○ポ！」  
「ざけんなこら！」  
正面の一人が足を振りかぶり、膝を振り上げる。  
「おぐあああっ！」  
ロリのつやつやの膝がスカートを跳ね上げて  
関の股間に減り込み、**肉玉を押し潰す。**

「てめえこの野郎！」

「今胸触ったでしょ！」

「謝りなさいよこの変態！」

「キ○タマ蹴られたいの?!」

「う、うるせーブスども！ 何が胸だ！ 胸なんざねーだろうが！」

なぜそう敵を増やし、強化する発言をするのだろうか。

関の一言に、群がっていた女子たちが激発する。

「セクハラじゃん！」

「この腐れチ○ポ！」

「ざけんなこら！」

正面の一人が足を振りかぶり、膝を振り上げる。

「おぐあああっ！」

ロリのつやつやの膝がスカートを跳ね上げて関の股間に減り込み、肉玉を押し潰す。

この世の終わりのような歪んだ顔を見せる関だが、その苦痛に満ちた顔に同情する女子は一人もいなかった。

知識としてはそこが急所なのはわかっていても、所詮肉玉がない側に生まれた者たちである。

「このがきやああ！ 痴漢の上にセクハラとはね！」

「キ〇タマ潰してやりましょう！」

「男子だからっていばんじゃねーぞ！」

「そうだそうだ！ キ〇タマ蹴っちゃえ！」

周りのロリたちが次々と膝を振るう。

ほとんどは尻や太股に当たるが、正面の数人のはゴチャゴチャと肉玉に直撃し、それを磨り潰す。

「おごがあああああっ！」

のたうち、倒れそうになる関だが、周り中から服や髪の毛をつかまれて倒れることも出来ない。

ゴスゴスと周囲からの膝蹴りを食らい、白目を剥く。

それを遠巻きに見ているエリナたち。

「あーあ、キ〇タマ取られちゃったね！」

笑うエリナ。

ニュアンス的には理解できるが、字面としてエリナが言うとシャレにならない気がする。

「あ！ 私たちが潰すはずのキ〇タマ横取りされたってことだよ☆ 去勢されたって話じゃないよ！」

「うん知ってる」

わりと適当なマリ。

「っていうか、大丈夫かな？」

アイ。

実のところクラスで一番筋力があるのはアイだった。

それにまったく自覚がないため、彼女の攻撃がエリナについて強烈だ。

先ほど放り出してきた二人は、マリが中心でやったほうは何とか立ち上がっているが、アイがやった方はまだ悶絶している。

にもかかわらず、「自分はほかの子より手加減する優しい子」というような顔で心配してみせる。

——よく言うよねえ、アイの攻撃食らった男子の反応はほかの子の食らったときと明らかに違うのに。まあ私の攻撃の方が効くけどさ。

心底心配そうなアイをチラッと横目で見つっ思うエリナ。

と、飽きたのか、泡を吹き出した関に不安を感じたのか、彼をもみくちやにし、肉玉をグチャグチャニしていたロリたちが急に離れる。

ドサ、とその場にやっ倒れられる関。

「よっしゃあああああああああ！」

それに、走りよるエリナ。

が、転がって痙攣している関に流石に追撃は出来ない。

「く……残念」

舌打ちする。

と、そこに、建物の中のほうから大人がやってくる。

外国人らしい褐色の肌の女。

「これは酷いわ」

「誰？」

眉を顰めるエリナ。

「あの人、どっかの大臣の人だよ。なんかうちの学校に視察に来てるんだって。クーゼラって言う人で……」

倒れた関を抱き起こす大臣。

「こんな事してたら、この子たちのキ〇タマ、クラッシュしちゃうじゃないの！ 二個とも！」

「うわ、お下品だなあ……」

眉を顰めるエリナ。

自分は二言目には肉玉の名を叫ぶが、地位ある大人がっていると引っかかるというかなり勝手な話だった。

「う、うう……そ、そうなんですよ」

何とか動き出す関。

手を伸ばす。

大臣の結構豊かな乳房に。

「……」

「あいつら、マジで酷いんです。毎日毎日俺たち男子のキ〇タマを……」

「こら、乳揉むんじゃない」

「でへへ」

関は、手から伝わる感触の柔らかさに頬を緩める。

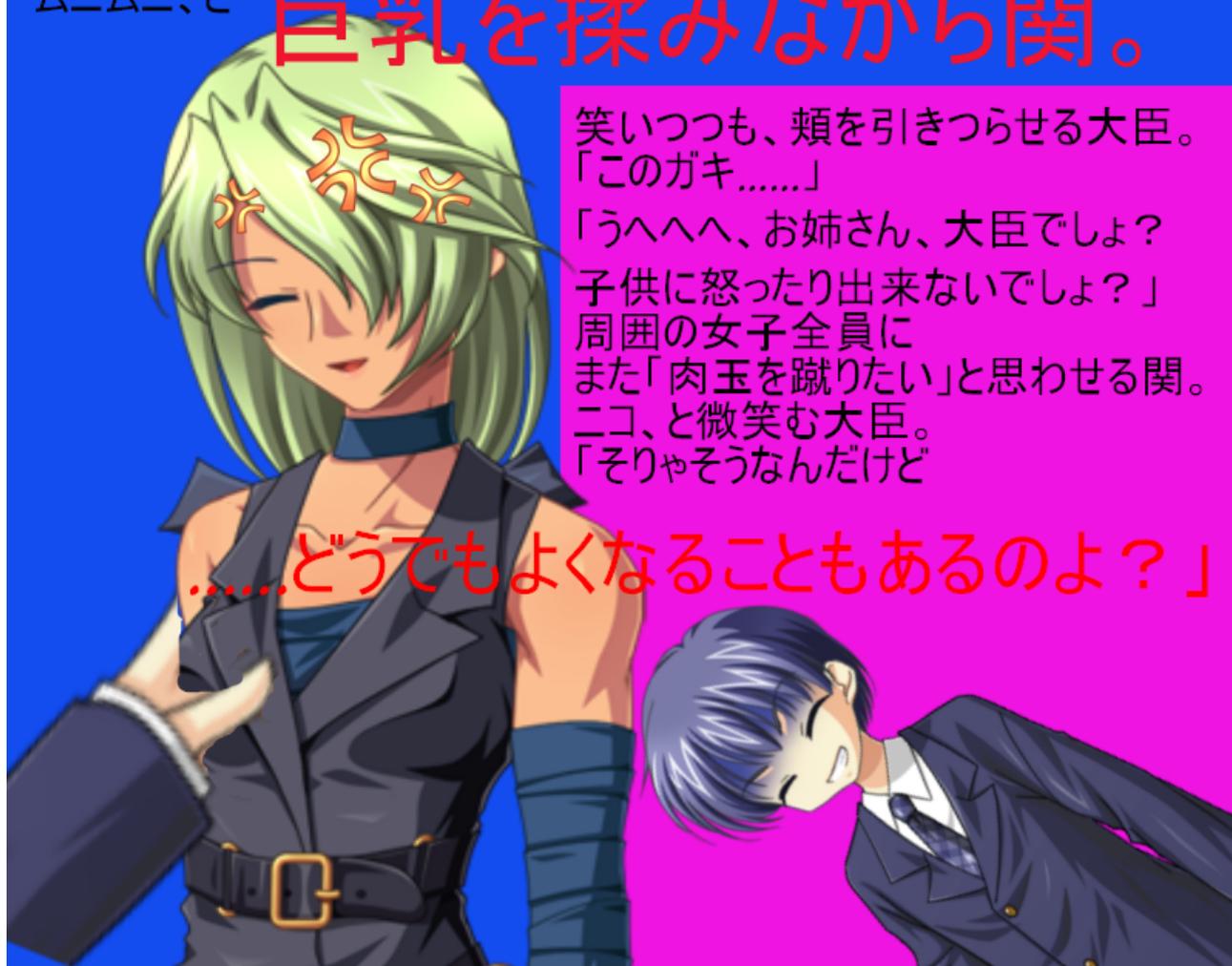
——日本人よ、これがオッパイだ！ 胸より腹が出たクソガキどもめ！ 何が痴漢だ、ったく、このぐらい膨らんでからいえつつうの。

口に出したらまた後で肉玉処刑を食らうことを考える関。

今それを口に出さないのは、単にほかに優先して言うことがあるからに過ぎない。

「大臣さんですよね……なにかうちの学校に言ってやってくれませんか？」

「大臣さんですよ、なにかうちの学校に言ってやってくれませんか？」  
ムニムニ、と **巨乳を揉みながら関。**



笑いつつも、頬を引きつらせる大臣。  
「このガキ……」

「うへへへ、お姉さん、大臣でしょ？」

子供に怒ったり出来ないでしょ？」

周囲の女子全員に  
また「肉玉を蹴りたい」と思わせる関。

ニコ、と微笑む大臣。

「そりゃそうなんだけど」

**……どうでもよくなることもあるのよ？」**

ムニムニ、と巨乳を揉みながら関。

笑いつつも、頬を引きつらせる大臣。

「このガキ……」

「うへへへ、お姉さん、大臣でしょ？ 子供に怒ったり出来ないでしょ？」

周囲の女子全員にまた「肉玉を蹴りたい」と思わせる関。

ニコ、と微笑む大臣。

「そりゃそうなんだけど……どうでもよくなることもあるのよ？」

ス、と手を引く関。

ロリたちの膝蹴りを食らいまくり、縮み上がった肉玉がさらに引き締まる。

体験版終わり

この後、男子たちに一筋の希望が！

そしてその希望破れるとき、いつものようにキ○タマ責めの破滅が男子たちを襲います。

続きは製品版でお楽しみください